LIFE DURING WARTIME

LUCIUS SHEPARD

戦時生活

ルーシャス・シェパード　小川 隆 訳

新潮文庫

Title: LIFE DURING WARTIME
Author: Lucius Shepard
Copyright © 1988 by Lucius Shepard
Japanese language paperback rights arranged
with A. M. Heath & Company Ltd., London
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

戦時生活

新潮文庫　シ－20－1

Published 1989 in Japan
by Shinchosha Company

平成元年九月十五日印刷
平成元年九月二十五日発行

訳者　小川隆

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社
郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替東京四－八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Takashi Ogawa 1989　Printed in Japan

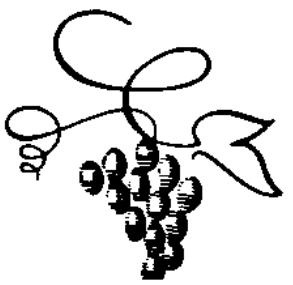
ISBN4-10-230101-1 C0197

江苏工业学院图书馆
藏书章

戰時生活

ルーシャス・シェパード

小川　隆 訳



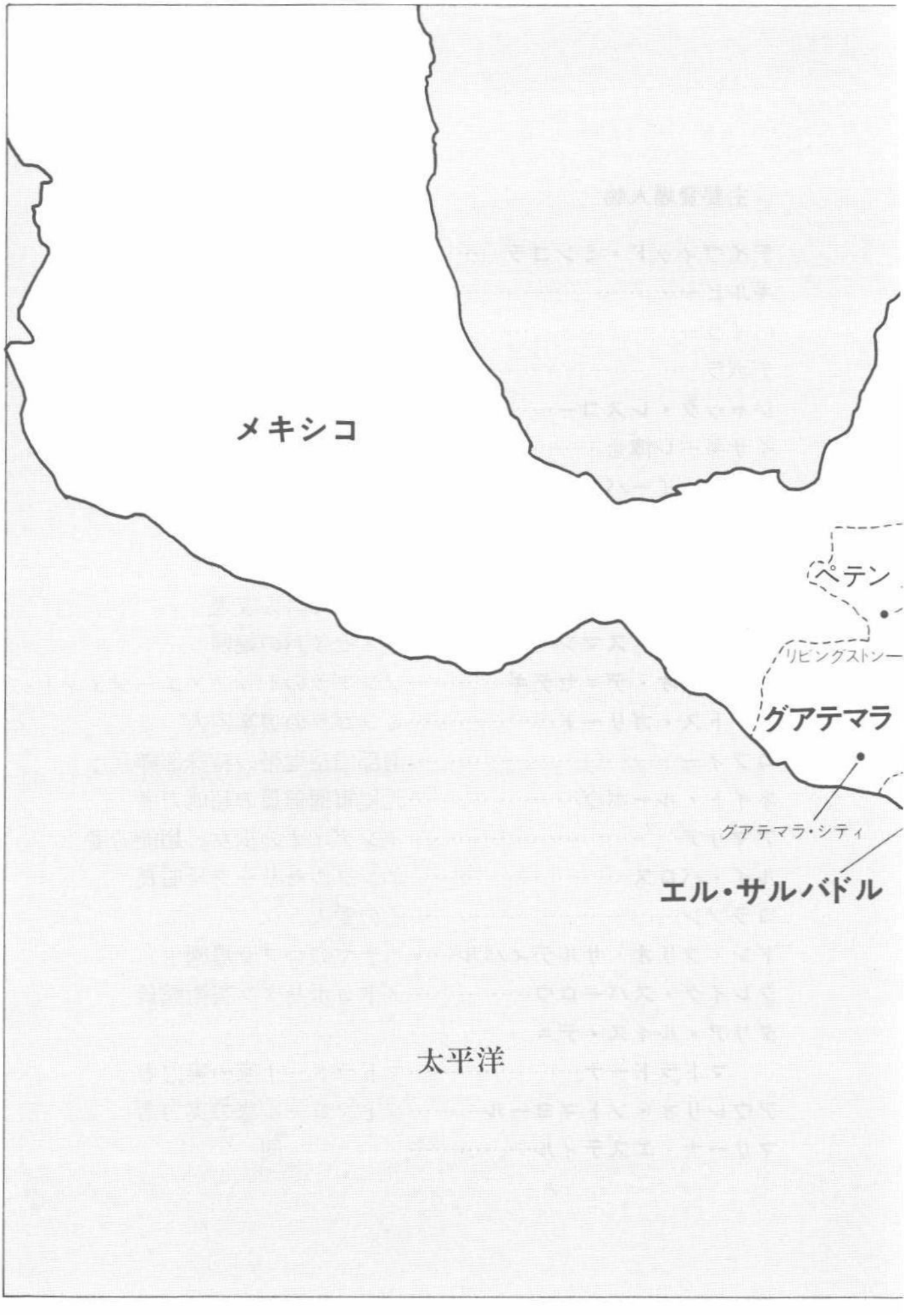
新潮社版

4334

戦時生活

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

キューバ
サヤクチェ
サンフランシスコ・デ=フティクラン
県
ロアタン島
カリブ海
ラ・セイバ
オランチート
(オランチョ)
ホンジュラス
ニカラグア
パナマ・シティ
コスタリカ
ダリエン山脈
パナマ


メキシコ
ペテン
リビングストン
グアテマラ
グアテマラ・シティ
エル・サルバドル
太平洋

主要登場人物

デイヴィッド・ミンゴラ……米軍砲兵隊特技士官
ギルビー……ミンゴラの戦友
ベイラー……　　同
デボラ……超能力者
ジャック・レスコー……プローラーのヴォーカリスト
イサギーレ博士……タリーの上司
タリー・イーバンクス……ミンゴラの超能力開発教官
ドナルド・イーバンクス……その腹ちがいの兄弟
エリザベス……その従姉妹
ナンシー・リヴァーズ……エリザベスの友達
アルビナ・グスマン……ラ・セイバの娼婦
オポロニオ・デ＝セデギ……ソンブラのトップ・エージェント
サントス・ガリード……ミンゴラの道案内人
コフィー……南部山岳地帯の特殊部隊兵士
ネイト・ルーボヴ……元従軍通信員の超能力者
アマリア……インディオの少女。超能力者
ルイ・バロス……エンソルセリータ号船長
コラソン……その愛人
ドン・フリオ・サルディバル……パナマのコプラ農園主
クレイグ・スパーロウ……メトロポリタン美術館員
ダリア・ルイス・デ＝
　マドラドーナ……マドラドーナ家の実力者
アウレリオ・ソトマヨール……ソトマヨール家の実力者
マリーナ・エスティル……　　同

第一部　R & R

ここで起こったのはいつもの事ですよ
四人のローマ人と五人のカルタゴ人が死にました……

――フェデリコ・ガルシア・ロルカ

1

胴に〈死神のささやき（Whispering Death）〉とペンキで書きつけられた、第一空挺部隊の新型シコルスキー武装ヘリが、ミンゴラとギルビーとベイラーの三人を〈アント・ファーム〉から、グリーン・ゾーンの中にある小さな町サンフランシスコ・デ＝フティクランまで、のせてくれた。グリーン・ゾーンは最新の地図では《自由グアテマラ占領区》にあてられていた。このグリーン・ゾーンの東側には、メキシコ国境からカリブ海まで横断するどちらにも属していない黄色の帯がある。〈アント・ファーム〉は黄色の帯の東端にある砲兵陣地で、ミンゴラ――まだ二十一歳にもならない砲兵特技士官――はそこから、地図に白黒で地勢しか描かれていない地域に砲弾を撃ちこんでいた。そんなわけで彼はいつも、自分は世界を原色にとって安全な場所にしておくための戦いに加わっているのだと考えていた。

ミンゴラたち三人はリオやカラカスでR&R（戦時休暇）をとることもできたのだが、こうした都市を訪れる連中は帰ってきたときに不注意になることが多かった。彼らはこれを見て、R&Rが楽しければそれだけ戦死を迎える可能性も高くなることを知り、いつもきまってグアテマラ国内の町でのもっとささやかな気晴らしを選ぶことにしたのだ。ほんとうの意味での友人だったわけではない。共通点はほとんどなく、めぐりあわせによっては敵同士になっていたかもしれな

い。だが、いっしょにR&Rをとることは生存の儀式のようなものとなっていた。選んだ町につくとすぐ、彼らはばらばらになってそれぞれまたべつの儀式を演じることになる。三人がこれまでのところ生きてこられたことから、この同じ儀式をつづけていれば無傷で勤務期間を終えることができるものと、信じるようになったのだ。けっしてお互いにこの信念を認めたことはなく、あいまいにしか口にしなかったし――それもまた儀式の一部だった――この儀式に異議をさしはさむものがでてくれば、三人もその非合理性を認めただろう。だが、戦争のもつ奇妙な特質が働いてそんな傾向を助長したのかもしれない、とも指摘したはずだ。

武装ヘリは町の西一マイルにある空軍基地に着陸した。コンクリート滑走路が一本あるだけで、三方を兵舎と事務所に囲まれ、すぐ裏手にまでジャングルが迫っていた。滑走路の中央でべつのシコルスキーが離着陸の練習をしていた――まるで酔っぱらった迷彩色のとんぼだ――そしてさらに二機が頭上で、心配顔の両親よろしくホバリングをつづけている。ミンゴラがとびおりると、熱風がシャツをばたばたとはためかせた。何週間かぶりの平服姿は、戦闘服にくらべて頼りない感じがした。彼は不安顔にあたりを見まわし、なかば、見えざる敵に無防備のところを不意うちされるのではないかと予期した。数名の整備士が、操縦席を破壊されたチョッパーの陰に集まっていた。黒こげになった金属からつきだしたプラスチックのかけらが、牙のような曲線を描いていた。埃まみれのジープが建物のあいだを動きまわっている。ぱりぱりに糊をきかせたような姿勢の中尉たちが、アルミの棺桶を高く積みあげたフォークリフトにむかってきびきびと直列をつくる。午後の陽ざしが棺桶の継目や取っ手にまばゆい輝きをはなち、遠くの兵舎の列がオリーブ色の海の荒れ騒ぐ波のように、熱気のもやの中で揺れる。情景の不調和が――この絵からまちが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いをさがしてください式の恐怖と平凡の混成が――ミンゴラの胸をしめつける。左手がふるえだし、光はさらにまばゆくなって、力がぬけ気が遠くなってゆく。彼はシコルスキーのロケット収納部によりかかって体を支えた。はるか頭上では、飛行機雲がまっ青な空のひろがりの中に消えてゆく。XL16がニカラグアを穴だらけにしにでかけていったのだ。彼は憧れに似た想いをこめてそれをながめ、エンジン音に耳を澄ませたが、きこえるのは夢見心地に誘うようなシコルスキーのささやきだけだった。

ギルビーはコックピットの奥のコンピュータ・デッキにつうじるハッチからひょいととびおりて、ついてもいないジーンズの埃をはらうと、ぶらぶらとミンゴラのところまでやってきて両手を腰にあてた。背の低いたくましい若者で、クルーカットの金髪といらだたしげな口元が、すねた子供のように見せていた。ベイラーがハッチから首をつきだし、心配そうに地平線方向のようすをうかがった。長身で痩せこけ、ミンゴラより二つ三つ年上だった。柔らかくまっすぐな髪は黒く、にきびだらけのオリーブ色の肌をもち、手斧でかたちをととのえたのかというぐらいいかつい顔だちをしていた。シコルスキーの胴体に手を置いたが、〈死神のささやき〉の炎のようなWの文字にさわっていることに気づいて、まるで火傷をするとでもいわんばかりの勢いであわてひっこめた。三日前に〈アント・ファーム〉にたいする総攻撃がおこなわれたばかりで、ベイラーはまだそれからたちなおっていなかった。ミンゴラも同じだった。ギルビーに影響があるのかどうかはわからなかった。

シコルスキーのパイロットの片割れが操縦席のドアを少しあけた。「フリスコ（訳注 サンフランシスコ・デ＝フテイクランの略称）への足は駐屯地売店（PX）でつかまるからな」黒い球形のバイザーのせいで、声がく

ぐもった。太陽がバイザーにまっ白な影を落とし、ヘルメットは星が一つだけうかぶ夜空を封じこめているように見えた。

「PXはどこだ？」とギルビーがたずねた。

パイロットの声はくぐもってきこえなかった。

「はあ？」とギルビーはきき返した。

パイロットの返事はまたしてもかき消され、ギルビーはかっとなった。「そいつをとればいいだろうに！」

「これか？」パイロットはバイザーを指さした。「なぜだ？」

「おまえの声がきこえるようにだ」

「いまはきこえてるんだろう？」

「わかった」ギルビーの声が硬ばった。「そのくそったれPXとやらはどこなんだ？」

パイロットの答はよくわからなかった。顔の見えないマスクがギルビーを意図のわからない視線で見すえた。

ギルビーはこぶしを固めた。「そのくそったれをとれっていうんだ！」

「そんなわけにはいかないんだよ、兵隊さん」もう一人のパイロットが身をのりだすと、二つの黒い球がほとんどならびあっているようだった。彼は自分のバイザーをたたき、「おれたちの目にくそったれ光線をぶちこむマイクロ回路がはいってるんだ。視神経に作用するのさ。こいつのおかげで、どこにひそんでいようと豆食らい（訳注　中米人の蔑称）の姿が見えるってわけだ。つけっぱなしにしておいたほうがよく見えるんでね」

ベイラーはけたたましい笑い声をあげ、ギルビーは「ばかいえ！」と叫んだ。ミンゴラは当然のことながら、パイロットがギルビーをからかっているのだと思った。さもなければ、おそらくは錯覚による思いこみで、バイザーがほんとうに特別の力を与えてくれるという迷信を抱き、ヘルメットをぬぐのをいやがっているのだ。だが戦闘用のドラッグが支給され、超能力者が敵の動きを予知するような戦争にあっては、どんなことだってあり得る。たとえ視力を増強させるマイクロ回路などというものであってもだ。

「どっちにしろ、おれたちの顔なんか見たいとは思わんだろうよ」と最初のパイロットがいった。「光線が顔をめちゃめちゃにしてるんでね。おれたちは顔の崩れちまったおふくろみたいなもんさ」

「もちろん、おたくたちにちがいはわからないかもしれないけどな」と片割れ。「たいていのやつらは気づかない。でも、気づいたらおしまいさ」

パイロットの崩れた顔を想像して、ミンゴラの胃にひんやりした不快なものがこみあげた。だが、ギルビーはとりあわなかった。「おれがアホだと思っているのか？」首をまっ赤にしてどなる。

「とんでもない」と最初のパイロット。「あんたがアホじゃないことは、ちゃーんと見えてるさ。何しろ、光線のおかげで他人に見えないこともたくさんわかるんでね」

「気味のわりいもんばっかりさ」と二番目が割りこむ。「たとえば、霊魂なんかだ」

「幽霊だ」

「未来だって見えるぞ」

「未来が最高だぜ。あんたたちもこれからどうなるのか知りたいだろう、教えてやるよ」
彼らはユニゾンでうなずき、日光の輝きが両方のバイザーの表面をすべった。二体の邪悪なロボットが同じプログラムに反応している。
ギルビーは操縦席のドアに突進した。最初のパイロットがばたんとそれをしめ、ギルビーは悪態をつきながらプラスチックをたたいた。もう一人のパイロットが操縦盤のスイッチをいれると、一拍おいてアンプで拡大された声が轟いた。「あのフォークリフトのわきをまっすぐぬけて、兵舎にでるんだ。すぐPXにぶつかるさ」
ミンゴラとベイラーが二人がかりでようやくシコルスキーからひきはなしても、ギルビーは棺桶を積んだフォークリフトの近くにひきずられてゆくまで、わめくのをやめようとしなかった。棺桶は巨人の宝のような途方もない銀塊だった。ようやく彼は静かになり、視線を落とした。PXの前で、まんまとMPの伍長に同乗させてもらう交渉をまとめ、ジープがコンクリートの上を快調に走りだすと、ミンゴラは自分たちを運んできたシコルスキーにちらっと目をやった。二人のパイロットは地面にカンバス布をひろげ、パンツ一枚になって日光浴をはじめていた。だが、ヘルメットはつけたまま。日焼けした肉体と、輝く黒い頭の不気味な組合せに、蠅といっしょに物質転送機にはいったおかげで肩の上に蠅の頭をのせるはめになった男のでてくる古い映画を思いだし、ミンゴラは胸騒ぎがしてならなかった。きっと、ヘルメットはあんなものなのだろう。とりはずすわけにはいかないものなのだ。きっと戦争はそこまでおかしくなっているのだろう。
MP伍長は彼がパイロットを見ているのに気づき、ぷっと吹きだした。いかにもわけ知り顔にきっぱりとした口調で彼はいった。「あの連中はどうにもならん変態だぜ」

六年前まで、サンフランシスコ・デ＝フティクランは、ドゥルセ河の東岸にひろがる椰子とバナナの茂みの中、パン・アメリカン・ハイウェイにつうじる砂利道と川との交差するところに点点とならんだ、ひと握りの椰子の葉ぶきの小屋とコンクリート・ブロックの建物にすぎなかった。だが、それ以来町は両岸のかなりの地域を占め、数十軒のバーや売春宿ができていた。ありとあらゆる極彩色の漆喰塗りの箱型の建物で、そのブリキの屋根には空想上の動物のネオンサインがのっていた。ドラゴン、ユニコーン、火の鳥、ケンタウルス。MP伍長はサインは広告ではなく、記号化された誇りのシンボルなのだとミンゴラに教えた。たとえば、緑の百合とブルーの十字架のあいだにうずくまる翼のある赤い虎の像からは、持ち主が金持ちで、カトリックの秘密結社の一員で、中央政治にたいして相反する気持ちをもっていることがわかる。古いサインはたえずとりはずされ、利益があがっているしるしに前より大きな、もっと手のこんだものがそれに代わる。そしてこの光とかたちの戦争は、サンフランシスコ・デ＝フティクランが町というよりは戦争のしるしであるがゆえに、時と場所を得たものだ。夜間には、その上空は明るく輝くものの、地上はみすぼらしくつまらない。きらわれものの犬は餌を求めてうろつき、したたかな娼婦たちは窓から唾を吐きかけ、伍長によれば死体にぶつかるのもそう珍しいことではないという。ジャングルのはずれに住む戦争孤児のギャングの手にかかるらしい。バーのあいだをとおる黄褐色の土の狭い通りには、ぺしゃんこになった空缶や、犬の糞や、ガラスの破片が散乱している。どの街角にも難民がいて、火傷の跡や銃弾でうけた傷を見せながら、物乞いをしている。建物の多くは急ごしらえで、壁は曲がり、屋根も傾き、そのおかげで家の影は精神を病んだ画家の作品の影のようにアンバランスな線が誇張されて、その底にひそむ変態じみた緊張感の視覚的表現となってい

る。それでも、その中を歩きながらミンゴラはくつろぎ、ほとんど幸福ともいえるような気分でいた。それは、ある程度まで今度はすごいR&Rになるぞという予感（彼は直観を信じるようになっていた）のせいでもあったが、主として、こういった町が彼にとっては死後の人生にも等しい、厳しい生存の期間をたえぬいた報酬となっていることの現れだといってよかった。

伍長がドラッグストアの前でおろしてくれたので、ミンゴラは文房具セットの箱を買い、それから三人で一杯やりに《クラブ・デモーニオ》にいった。そこは狭い店で、天井からぶらさがっている放射線を放つ果物のような紫の電球のきつい明りに照らされて、水漆喰の壁がかすかな蛍光をうかべていた。クラブは兵隊と娼婦でごった返し、そのほとんどがキングサイズのベッドぐらいのひろさしかないダンス・フロアを囲むテーブルに陣どっていた。二組のカップルが、木枠に金網をうちつけてしっかり囲ったジュークボックスから流れるバラードにあわせて、体を揺すっていた。タバコの煙のヴェールが、海の底を思わせるようにゆったりと彼らの頭上を流れてゆく。娼婦に乱暴している兵隊もいたし、一人の娼婦は酔いつぶれる寸前の兵隊の財布をくすねようとしていた。その手が兵隊の股間をなでて、腰を使うように誘い、男がそのとおりにすると、反対の手がぴっちりしたジーンズの尻のポケットからのぞく財布をまさぐる。だが、そうした動きもすべてさして気がなく、まるで暗い照明と甘ったるい音楽が空気を重くし、動きをおさえているような感じだった。ミンゴラはカウンターに陣どった。バーテンダーが瞳孔の中心を紫の光にくりぬかれたような目で、問いかけるような視線をむけたので、ミンゴラは「ビール」といった。

「おい、あれを見ろよ！」ギルビーが隣りのスツールにすべりこんで、カウンターの端にいる娼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com